

# 3.11 ソレカラ

～障害者・  
福祉職員の  
「あの日」と  
「ソレカラ」～

◎飛川義親さん（男性／当時40代／SMA[脊髄性筋萎縮症]）

## 大災害時は避難の移動が最大の心配事。 ベッドで寝られず車椅子に乗ったままだった。



— 飛川義親さん —



— 自宅脇に設置された車いすの昇降器 —

### 地震直後

職員が車椅子を持ち上げ、隣の病院に避難。母親が迎えに来るも、津波で断念。

3月11日当日、石巻市の自宅を離れ、東松島市の沿岸部にあるデイサービスで過ごしていた飛川さん。間もなく帰路につこうとしていた時に、大地震に見舞われました。揺れが収まった後、職員の提案で近所の老人ホームに避難することになりましたが、いざ避難を始めようとした時に津波が襲来。デイサービスは道路と同じ高さのバリアフリーのため、他の建物よりも早く水が来てしまったのです。そこで職員が、かさ上げされた隣接する病院に急いで確認を取り、病院に避難することにしました。飛川さんは普段から車椅子を使用していたため、避難時も飛川さんが津波に浸からないよう、職員3～4名が車椅子ごと持ち上げて移動しました。

デイサービス利用者と職員は、病院の1階待合室に避難したものの、窓越しに見える国道45号線に水が流れ、木や車を押し流している様子を確認し、2階の病室に避難させてもらうことにしました。飛川さんは2階に移動してからも恐怖が絶えず、ずっと震えていたといいます。

この頃、まだかろうじて携帯電話が通じていました。飛川さんは母親に「病院に避難しているから、母さんもどこかに逃げて」とメールを入れますが、母親はすでにデイサービスに向かって車を走らせていました。デイサービスまであと数十メートルまで来たところで津波の存在を知り、急いで自宅まで引き返します。道中、近所の方々に津波が来たことを大声で知らせと一緒に同じ場所に避難したことで、飛川さんも母親も、そして近所の方々も津波の被害に遭うことはありませんでした。

### 避難

病院から老人ホームに移動。弟や母親が来訪し、無事に自宅に戻る。

大地震の翌日、当初避難する予定だった老人ホームに、職員の車で移動することになりました。移動後、老人ホームに上着や薬を持って、同居している弟が来てくれました。弟は地震直後、勤務先の角田市からすぐに車で移動を始めましたが、自宅に着いたのは翌日の朝。自宅の5km手前から浸水のため車で走行できず、水の中を歩いて自宅に戻り、上着と薬を取ってきてくれたのです。津波で床下浸水した自宅は、水が引いて何とか生活ができようになったので、母親がその日の夕方に飛川さんを迎えに来てくれ、無事自宅に帰ることができました。

### 自宅で

川の両岸で大きく異なった被害。ベッドではなく車椅子で寝る日々。

飛川さんの自宅がある地域は川が流れており、自宅は川によって津波がせき止められたため、床下浸水という被害で済みました。しかし川の反対側は被害が大きく、多くの方が亡くなってしまいました。

飛川さん宅も、自宅に出入りするための電気リフトや給湯器等が津波で水没。部屋の床にビニール袋を敷いて家族一緒の生活が再び始まりましたが、飛川さんは余震やその後の避難に備えるため、睡眠も車椅子でとるという生活が1週間も続きました。

(2 枚目に続く)